

6. 日常の養豚農家への衛生指導等を基にした初動防疫体制の円滑な構築

豊後大野家畜保健衛生所 1) 大分家畜保健衛生所
○汐月貴紀・(病鑑) 滝澤亮・(病鑑) 河上友・(病鑑) 河野泰三
病鑑 大木万由子¹⁾・病鑑 壁村光恵¹⁾・病鑑 梅田麻美¹⁾

【はじめに】

2022年6月、県は万が一の豚熱発生に備え、防疫措置が円滑に図られるよう、県下全養豚場の初動対応をシミュレートした事前準備を開始。当家保では、日常的に各養豚農家が抱える課題を認識し、衛生対策を中心とした生産性向上と慢性疾病低減に資する巡回指導を実施。こうした取組を通じ、初動防疫事前計画（以下事前計画）を生産者と一体となって整備したので、日頃の取組事例と併せ、事前計画の作成概要を報告。

【主な取組事例】

- ・A 農場：豚熱緊急立入を契機とした病性鑑定と環境改善：子豚数頭が急死したとの届け出を受理。立入検査を実施し、豚熱を含む種々の疾病を否定。猛暑と生産方式転換による一時的な頭数増加に伴う密飼い状態であったことから、熱射病と診断。緊急的に給水器・換気扇の増設等を指導したことで死廃数が改善。
- ・B 農場：定期繁殖検診による生産性向上への支援：豚の発情に合わせた三週間周期で妊娠診断を行い、濃密指導を実施。繁殖検診データを分析し、不妊の豚について従業員と発情兆候と種付け時の様子を検討。別々の従業員が実施していた人工授精部門を二人の協同発情確認に変更。結果、一腹あたり産子数が増加（2021年9月：14腹で160頭、11.4頭/腹。2022年9月：18腹で236頭、13.1頭/腹）。
- ・C 農場：大規模農場の管理獣医師と連携した総合衛生対策：GP農場を併設する大型農場。当該農場では、管理獣医師と家保が協同し、年2回、発育ステージ別に採血を実施。PRRS等の動態を共有・検討をしながらワクチンを中心とした疾病対策を構築。

【豚熱発生に備えた初動体制の構築】

急ピッチでの事前計画作成が求められ、さらに個人的な情報を聞き取る必要があることから、①畜主の理解と協力、②詳細な農場情報の収集、③飼養衛生管理基準に配慮した農場訪問、④具体的な作業動線の確認、⑤無駄のない動員計画の作成を重視し作業に着手。農場内の現地調査には、必ず農場責任者が帯同し、詳細情報を確認。約2ヶ月間で延べ17日間、41名の家畜防疫員を動員して15農場の事前計画を完成。

【まとめと考察】

事前計画には殺処分を前提とした農場内作業動線や埋却に関する事項の確認が必要。豚熱の侵入危険度が日増しに高まり、飼料や資材費も高騰する中、生産者にとっては、精神的および経済的に厳しい状況下で、作業に着手。本作業により心情的に農場主との間に大きな軋轢が生まれ、作業が難航すると想定されたが、丁寧な説明、作業への理解と協力を得ることで円滑に事前計画が完成。現在の情勢下で、管内すべての養豚場で事前計画を完成できたことは、日頃行っている農場巡回や指導で構築した信頼関係によるものと考察。今後も現在の業務を通じ生産者とのつながりを強化することで、家畜伝染病の早期発見と損耗防止を図り、さらには生産性向上に寄与したい。